

ISOM Japan NEWS Letter

第18回 ICOM 感想記

—ISOM における台湾中医師全聯会の最近の躍進—

医) 恩明会 塩浜宮崎医院 宮崎瑞明

私は10数年前より、当時の副事務総長室賀昭三先生（現任 ISOM 名誉会長）の依頼により、毎年日本東洋医学会総会会期中、同時開催した ISOM 理事会に中国語通訳として立ち会い、これが私と ISOM 接点の始まりであります。そして、第14回の ICOM(日本開催)に、準備委員会・実行委員として入り、第15回の ICOM（韓国開催）より理事として理事会に参加して、台湾側との連絡役として携わってきました。近年、台湾伝統医学界に大きな動向があり、特に ISOM における中で、台湾の役割も変動し、本文はこれについて二、三を述べます。

十数年前まで、台湾での東洋医学国際学会(ICOM を含む)の開催、国外伝統医学団体との交流などは、主に中医薬大学の著明な教授達（医学、薬学、鍼灸学）が先頭に立ってまとめてきました。以後、台湾中医師育成の向上につれて、中医師養成医大出身者が増加してきました。更に、中には外国留学を含む修士号、博士号を持つ者、または、中西医師資格（中医師・西洋医師両免許）を持つ者などの高学歴中医師も大勢含まれるようになりました。

台湾の国民皆保険制度（健保）は、1995年から導入され、西洋医学医療だけでなく、伝統医学医療（投薬はエキス剤が健保給付、煎じ薬が自費という混合診療）も含まれています。しかし、近年健保医療費は年々上昇し、健保診療制限がどんどん厳しくなったため、医業経営の面では混合診療の中医師のほうが西洋医師よりかえって恵まれるようになってきました。その影響で、中医師の社会的地位が上昇し、政治的活動も精力的に参加してきました。

同時に、中華民国中医師公会全国聯合会（以下台湾中医師全聯会）を中心に結束力を高め、学術性と専門性を上げてきました。まず、台北市中医師公会は10数年前から力をつけ、理事長・理事を中心に毎年国際中医薬学術大会を定期に開催し、大韓韓医師協会をはじめ国外の伝統医学団体と交流し、友好協定を結んで国内外から注目されています。



台湾セッションの一風景

台湾セッションの構成と演者の経歴

- 特別講演：Evidence-based medicine in acupuncture analgesia
acupuncture analgesia 林昭庚（元台湾中医師公会全聯会理事長）
- 講演1：The assessment of traditional Chinese medicine on the risk of dementia in stroke patient 施純全（元台北市中医師公会理事長）
- 講演2：Traditional Chinese Medicine Treatment for acne 陳潮宗（台湾中医師公会全聯会常任理事）
- 講演3：Misdiagnosed menopause symptoms 陳俊明（台湾中医師公会全聯会副理事長）
- 講演4：Therapeutic experience on facial nerve palsy 李豊裕（台湾中医師公会全聯会副理事長）
- 講演5：The clinical application of Qing-Shang-Juan-Tong-Tang in the treatment of headache 陳志芳（台湾中医師公会全聯会顧問）
- 講演6：WEN's acupuncture : Modulation autonomic nervous of system 温崇凱（台湾中医師公会全聯会学術顧問）

そして4年前、台湾中医師全聯会理事長に何永成先生が昇任した後、何理事長がリーダーシップを発揮しました。まず17回 ICOM（台北）を共同会頭として開催し大成功を収めました。また、ISOM 理事会（台湾理事5名）に台湾中医師全聯会副理事長二人を送り込み、影響力も付けてきました。更に、今回18回 ICOM のなかの特別企画の一つである「台湾セッション」に台湾中医師全聯会が全面協力し、多くの学者を含む数十

名の参加団を送り、全力バックアップしました。「台湾セッション」の構成は表1に示すように、演者全員は台湾中医師全聯会の精鋭で、伝統医学の臨床治療を中心に発表しました。特に前半は、英語で発表したため、多くの韓医師(特に美容、鍼灸の分野)も参加し、英語で質疑応対、レベルが高く素晴らしいものでした。このように ISOM に対し台湾中医師全聯会が全力で協力し、存在感を増しています。

また、今回 ICOM 会期中に行った理事会の中で、次回 ICOM 開催地選出の案件にて、ある地域の立候補に対し、台湾側が強く異議を示しました。その上、第 17 回 ICOM (台北)を開催したばかりに関わらず、理事会に出席した、台湾中医薬行政長官及び台湾中医師全聯会代表理事を中心に短時間で意見をまとめました。第 19 回 ICOM の開催に台湾も立候補し、韓国・日本側は驚きましたが、決定には至りませんでした。しかし、今回台湾側が自国の国益を守る為の結束力を感じる次第であります。

近年国際東洋医学界は、中国の活躍などにつれ、大きく変動しています。創立以来 40 数年の歴史を有する ISOM が、より発展するため、学術面の向上、運営面の改革などいろいろ解決しなければなりません。また各国の政治的因子などの配慮も大切であります。今後さらに、日・韓・台三理事国の協力が必要であります。これからも私は引き続き、台湾伝統医学界と交流し、台湾中医師全聯会の躍進に注目したいと思います。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

日韓東洋医学シンポジウムの感想

吉富復陽堂医院 吉富誠

日韓東洋医学シンポジウムは韓国の鮮于基先生の発案で 2003 年より始まり、日韓を往復して両国の伝統医学の相互理解を深めてきました。今回で 23 回を迎えました。当初開催が危ぶまれていましたが、金英信先生の多大なご尽力のおかげで、韓国より 3 名の高名な先生方が演題を出して沖縄に来ていただきました。まず日本側の発表は私吉富が「日韓漢方交流史」と題し、主に戦後の日韓交流の歴史をお話しました。本格的な交流の始まりは 1961 年に裴元植先生が第 12 回日本東洋医学会総会に来賓として参加なさったことから始まりました。1985 年坂口弘先生が京都で開催された第 4 回国際東洋医学会の成功で日韓の交流はさらに進みました。2003 年以降韓流ドラマは両国の交流を促進しました。日韓東洋医学シンポジウムを通じて理解できた両国の医療制度・教育制度の違い、共通に抱える生薬原料費の高騰問題・国際標準化と地域多様性との確執などを提示しました。

2 番目の演題は韓医学教育の最高峰である慶熙大学校韓方病院病院長の催道永先生の「Acupuncture for Smoking Cessation in Korea」題して韓国で行われている禁煙鍼のご紹介でした。主に口点・内鼻点・咽喉点・気管点・肺点・神門点・内分泌点の 7 つの耳穴に皮内鍼を用い禁煙希望患者に耳針を施しているそうです。1993 年以降の研究論文を提示されました。2009 年にレトロスペクティブな対照群研究が発表され、実験群(耳鍼+一般的な禁煙プログラム)は 73.2%で、対照群(一般禁煙プログラム)の 45.1%と有意に高い禁煙成功率であったとのこと。現在韓医学では、禁煙の治療を目的に耳鍼療法が盛んに行われているそうです。

第 3 題は大邱韓医大学鍼灸醫學科の李法宗先生の「韓国の埋線療法」という演題でした。吸収性縫合糸のポリジオキサノン縫合糸を、注射針を使って皮下に埋没させる治療法です。主に顔面神経麻痺や美容目的で用いられてきましたが、最近では、筋骨格系疾患の論文が報告されているそうです。

第 4 題は大韓傷寒金匱醫學會長・盧永範先生の「傷寒論の真実と臨床応用」という演題でした。先生は、韓国の傷寒論学派の第一人者です。傷寒論を理解するためには傷寒論が書かれた時代の古文字学を知らなければならないと、古文字学に基づいた六病位の解釈の一端を披露されました。さらにその解釈に基づいて、パニック障害の患者を苓桂朮甘湯で治療した症例などを呈示されました。



日韓東洋医学シンポジウムの一風景

学会当日の早朝に発災した熊本地震のため、私は日韓東洋医学シンポジウムが終了直後に、あわただしく予定を早めて帰還しました為、発表後にゆっくり演者の先生方とお話

することができず残念でした。あらためて今回お世話になった金英信先生をはじめ韓国の先生方に感謝申し上げます。

☆

☆

☆

☆

☆

第18回 ICOM Japan Session を終えて

大阪学院医系研究科漢方医学寄附講座 萩原圭祐

今回、私は、練馬総合病院中田英之先生と共に、ICOM の最終日に行われた午前の Japan Session の座長を務めさせて頂きました。現在、我が国は、世界で、どの国も経験していない超高齢社会に直面しており、要介護・寝たきりの対策が、重大な社会問題となっています。そこで、我々は、「フレイル・サルコペニアでの東洋医学の役割」と題してシンポジウムを行いました。

フレイルとは、2014年日本老年医学会から提唱された、高齢者の介護前段階を意味する新しい用語で、まだ耳慣れない先生も多いと思います。フレイルは、運動機能の低下を意味するロコモティブシンドロームやサルコペニア（加齢性筋肉減少症）などを背景にした身体面や、うつ・認知症を背景にした精神・心理面、独居や閉じこもりを背景にした社会面を含めて考える多様な概念に拡張しつつあります。私自身は、フレイル対策においては、東洋医学こそ切り札であると考えています。なぜなら、東洋医学には、腎の概念が存在し、古来より、老化現象を包括的にとらえてきた伝統があり、日常診療においても、全人的医療を掲げ患者さんに接し、診療にあたっています。そういった日本におけるフレイル対策の取り組みをこのシンポジウムでは紹介しました。

初めに、私の方から、フレイル・サルコペニアの概念と東洋医学との関連、私の研究室で取り組んでいる牛車腎気丸の抗サルコペニア効果の分子機序について解説しました。次に、大阪大学精神科田上真次先生から、認知症における基礎的背景、今後の治療および発症予防戦略について解説がありました。あおい薬局の薬剤師寺本仁先生は、最初に、ディジュリドゥというオーストラリア先住民アボリジニの伝統楽器の地響きのような荘厳な音を奏でられ、参加者の度肝を抜かれた後に、漢方医と鍼灸士、介護士との連携による在宅における東洋医学的寝たきり予防の取り組みについて解説を行いました。

最後に、中田先生からは、重症化された中田先生の御母堂の漢方治療と先端医学との融合によるダイナミックな臨床経過が提示され、退院後に、鍼灸も含めた東洋医学的フレイル対策について解説がありました。開催日時が ICOM の最終日で、招待講演が別会場で同時に行われていたにもかかわらず、シンポジウム当日は、多数の方々にお越しいただきました。熱心に聴講いただき、議論も活発で、ありがとうございました。おかげさまで、基礎・臨床の両面から日本におけるフレイル対策への東洋医学の取り組みを示すことができたと思っております。予算の関係で、日本語のみのセッションとなったのが、非常に残念でした。

最後になりますが、今回、このような、シンポジウムの機会を与えて下さった会頭の中田敬悟先生、開催にあたりお世話になった実行委員の牧野利明先生に、この場を借りてお礼申し上げます。



アボリジニの伝統楽器を吹く寺本先生



Japan Session の一風景



Japan Session の座長と演者の皆さん

薬剤師向け特別講演

— 生薬・漢方薬・機能性食品と医薬品の薬物相互作用について —

琉球大学医学部附属病院薬剤部 中村克徳

第18回国際東洋医学会において、薬剤師向け講座「生薬・漢方薬・機能性食品と医薬品の薬物相互作用について」と題した発表をいたしました。東洋医学を専門としない一般の薬剤師の先生方向けの教育講演ということでしたが、会場には沖縄県内・県外そして海外で東洋医学を専門とした医療に携わっている医師・薬剤師等の医療従事者の先生方にも参加していただきました。

私は、今回の講演をご依頼いただいた名古屋市立大学大学院薬学研究科生薬学分野教授の牧野利明教授と異なり東洋医学の専門家というわけではないのですが、開催地である沖縄県の琉球大学附属病院の薬剤部長としてお話をさせていただきました。

生薬・漢方薬・機能性食品は、医療・健康増進に沖縄県でも広く利用されています。世界のサプリメント市場をけん引するのは米国市場であるといわれていますが、わが国でもできるだけ病院に行かずに病気を治すという考え方の普及やご高齢の方々の増加に伴い、健康増進や健康維持を目指した、いわゆる健康食品ブームが起こっています。

沖縄県は、米軍基地で働く米国人の方が多いこと、沖縄県に古くから伝わる伝承薬があることなどから、生薬・漢方薬や機能性食品（健康食品やサプリメントを含む）が病院で処方される西洋薬と相互作用し、トラブルとなるケースが比較的多くあります。何らかの西洋薬を飲んでいる場合には、その医薬品との相性（相互作用の可能性）について知っておくことが大切です。

本講演では、生薬・漢方薬や機能性食品と医薬品との相互作用の代表的な事例を紹介し、服薬指導の参考としていただくことを目的としてお話ししました。講演終了後にもたくさんご質問いただき、会場にお越しいただいた皆様の学習意欲が高いことに感心いたしました。生薬・漢方薬は適切に使うと西洋薬で治療が難しかった症状にも効果を発揮する場合があります。また機能性食品など“食”を中心とした健康に対する関心の高まりは、予防医学の観点からも非常に重要です。

しかし、健康食品やサプリメントを不適切に飲んでいらっしゃる患者さんも残念ながら多くなっています。相互作用に注意が必要な医薬品を服用している患者さんであっても、健康食品やサプリメントを医師・薬剤師に相談することなく患者さんの自己判断で摂取されている場合があります。注意が必要です。

病院の薬剤師は入院時持参薬チェック時、薬局薬剤師はかかりつけ薬剤師としての指導の際に、西洋薬間の相互作用のみならず、生薬・漢方薬・機能性食品と医薬品の相互作用にも注意を払う必要があります。本講演をきっかけとして、薬剤師が、生薬・漢方薬・機能性食品についても情報を収集し、患者さんに対する適切な相互作用等の情報提供が推進されることを期待するとともに、国際東洋医学会の益々のご発展を祈念いたします。



盛況だった薬剤師向け講演会

ISOM Japan ニューズレター 2016 No.2
発行日 2016年10月5日
編集者 ニューズレター編集委員会
発行者 安井廣迪
発行所 国際東洋医学会日本支部 (ISOM Japan)

国際東洋医学会日本支部 ISOM Japan

名古屋市瑞穂区田辺通3-1
名古屋市立大学薬学部生薬学分野内
TEL&FAX 052-836-3416
Email: icom-japan@phar.nagoya-cu.ac.jp
ウェブサイト <http://isomjpn.umin.jp/>